

千葉市制 100 周年記念 第 3 回千葉氏サミット

基 調 講 演

開催日：令和 3 年 8 月 21 日（土）

会 場：三井ガーデンホテル千葉

○司会 皆様、お時間となりましたので、ただいまより、千葉市制 100 周年記念第 3 回千葉氏サミットを始めさせていただきます。

本日の司会の「はやしまりい」と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

【主催者挨拶】

○司会 それでは、開会に当たりまして、主催者であります千葉氏サミット実行委員会委員長千葉滋胤より、御挨拶を申し上げます。どうぞよろしくお願いいたします。

○委員長（千葉） 御紹介いただきました千葉でございます。コロナの災害、いろいろ複雑に絡み合って、まあ千葉だけじゃございませんけども、日本全国大変なようなときに、この会を催されるという千葉市の皆さん、御担当の方々に深く御礼を申し上げたいと思います。

実は、私、この会の今紹介がありました会長を務めておりますけども、これは、なりたくてというよりも、そういうところに生まれてきたんだから、しょうがないんでしょうけれども、実は、千葉の関係から言いますと、千葉常胤の子供の中で、6 人おりまして、その一番最後が私どもの系図上をたぐってみますと、そういうことになって、胤頼でございますけども、これは、千葉と言いましても、千葉のこの亥鼻山を含めた千葉市のほうではなくて、東の外れのほうにあります香取のほうの出身で、御承知のように、同じ千葉でもですね、常胤を初めとして、親父さん、常胤ですけども、それには関係なく郡上八幡のほうで、一番最後の六郎胤頼というのが系図上で見ますと、そういうことになっているようでございます。

そんなこんなで、いろいろ、戦争中、私ども生まれが昭和の私は 8 年でございますから、1933 年ですか、その生まれでございますので、入ったときは、千葉市で小学校、附属小学校の男子部というところに入りまして、それで、旧制の学生でございましたから、学生制度旧制の千葉中学に入って、敗戦になってから、今度は千葉第一高等学校といいましたか、そういうところに名前が変わりまして。それから、新制のほうに変わった大学では、早稲田のほうに行きまして。それで出てから、地元で千葉銀行へ入って、それでずっと続けまして、途中終わってから、今度は、この隣の千葉商工会議所の会頭をやったり、いろいろ千葉に絡むことを生まれたときから今までずっと続けて、今も続けているわけでございます。

私どもも、千葉氏顕彰会という会は持って、いろいろ各大学の先生方を初めとして、いろいろ御協力いただいたりしていた皆さんが多いんですが、私ももう 88 を過ぎて、もうじき 89 になる歳ですから、考えてみると、もうじき 90 になっちゃうのかなと、馬齢をまさに重ねていておりますけども、皆さんの御支持を得て、都合がいいときは千葉にやらせろということで、名前だけは千葉にやらせろで済んじゃいますから、いろんなことは、スポーツの団

体から文化団体から、いろいろな問題を全部引き受けさせられているといったら語弊がございすけども、そういうような状況です。

きょうの会も、それぞれの中できますけども、千葉市の御担当の方を含めてですね、市が中心になって、いろいろ御指導・御協力をいただいておりますので、公務多忙でございすから、市長さんも何かおくと、4時過ぎとかというふうに聞いておりますけれども。市の皆さんにいろいろお世話いただいておりますし、市民の皆様にも直接・間接的にも御協力を賜っております。

神社のほうとお寺のほうは、またいろいろ別ですが、神社のほうも、千葉神社を初めとして、これは今からというよりは、代々、歴代、いろいろお世話になっておりますし、特に郡上のほうは、やはり特段いろいろ、遠く離れてはおりますけども、いろいろお世話いただいております。

きょうお集まりいただいて、こういう環境の中で、コロナ対策どうこう忙しい中でございすけども、御来会いただきまして、一応できる限りのことはというスタッフの皆さん、特段、特に千葉市の関連の皆さんには、いろいろお世話をいただきまして深く感謝するところでございす。

せっかくの機会でございますから、この機会を通してですね、地元の千葉市の変遷、これは千葉氏だけではなくて、千葉市の新しい対応、明治政府のときから始まって、今までに至る新しい時代もそうですが、遡ってみれば、やはり歴史の中でのくのは、頼朝・常胤が千葉で結びつきができて、頼朝は鎌倉に、まあプリテンドしたのは、鎌倉に勧めたのは常胤だというふうになっておりますけども、そういうことでございすし、わかる範囲でも、各歴史の先生方からも言いますと、史実だけは不透明なところもございすけれども、ある程度、国史の担当の皆さんから聞きますと、一般に言われているとおりの史実が大体流れだと思っておりますので、そういう中で、今後、そういう対応をどう新しい世代の中で進めていくかというのは、学校教育もございましょうけれども、一つの祭りとしてくる、文化遺産としてくる、いろんな形でもって受け継ぎながら、やはり、その日々の生活の中に取り入れていくと。

まあ、お祭りが一番手取り早いんですが、お祭りの内容についても、いろいろ長い歴史の中で変遷もございすし、いろいろ、切り口は多少なりとも広がってまいら思っておりますので、あらゆる機会の中で、そういうものを生活の一部の中に取り入れて、自分たちの住んでいる場、千葉市並びに千葉県の中、下総、上総、安房とはございすけども、そういう中になっているんだという広がりや深みを増していけば、その生活の中での一つの見方、そういうものになるんだと思っておりますので、今後とも、機会あれば、ひとつよろしく願い申し上げまして、まとまりのない話ではございすけれども、よろしく申し上げまして、御挨拶にかえさせていただきます。

本日は、御多用中御来会賜りまして、まことにありがとうございます。よろしくお願い申し上げます。（拍手）

○司会 千葉委員長、どうもありがとうございます。

【趣旨説明】

○司会 この千葉氏サミットは、千葉一族という歴史的・文化的資源を通じた都市同士の交流により、関係自治体が友好関係を深め、それぞれの地域の活性化に資することを目的とし開催されるものです。

第1回目は平成28年に開かれ、ゆかりの都市が一堂に会し、千葉一族の全国的な知名度向上や地域の活性化に向けた経済・観光・防災など、さまざまな分野で連携していくこととした共同宣言を行いました。

平成30年には、千葉一族中興の祖、千葉常胤の生誕900年を記念し、第2回千葉氏サミットが開催され、ゆかりの都市同士の連携を深めるとともに、騎馬武者行列や記念講演、歴史文化フォーラムを実施し、千葉一族に対する理解促進を図ってまいりました。

そして、本日、第3回千葉氏サミットにつきましては、本年2021年1月1日に、ここ千葉市が市制100周年を迎えたことを記念し、開催されるものでございます。

会場の皆様並びに配信をごらんの皆様におかれましては、この千葉氏サミットをきっかけに、千葉一族への理解をさらに深め、郷土への愛着を育んでいただければ幸いです。

【千葉氏クイズ・商品紹介】

○司会 さて、本サミットにおきましては、千葉氏ゆかりの都市からのプレゼントが当たる千葉氏クイズを御用意しております。

会場の皆様には、お手元のプログラムの中に問題用紙が挟み込まれております。配信をごらんの皆様は、ホームページよりダウンロードができますので、ぜひ御応募くださいますようお願いいたします。

ここで、各都市から御提供いただいた商品を御紹介させていただきます。スクリーンをごらんください。

まず、一関市より、切り餅セット「もちの里」を2名様。涌谷町より、純米大吟醸「稀世」を3名様。相馬市より、地酒「夢そうま」を2名様。南相馬市より、「ちょっと贅沢おつまみセット」を2名様。千葉市からは、「月星餅どら」と幕張ブルワリークラフトビール6銘柄セットを各1名様。佐倉市より、御城印6枚セットを1名様。酒々井町より、「からつきピーナツ」を2名様。多古町より、「多古米・やまと芋セット」を2名様。東庄町より、「東庄町産SPF豚肉加工品セット」を2名様。郡上市より、「食品サンプル」を5名様。そして、小城市より「小城羊羹」と「芦刈のり」を各1名様にプレゼントいたします。

さらに、全問正解者の中から抽選で、千葉市制100周年グッズが当たるダブルチャンスもありますので、ぜひ皆様、全問正解に挑戦してください。

問題用紙につきましては、この後、受付に設置する応募箱へお帰りの際などに御投函ください。配信をごらんの皆様並びに御自宅でゆっくり考えたいという方は、後日、おはがきや

電子申請で御応募も可能です。応募締め切りは9月6日までとなりますので、御注意ください。

【注意事項の説明】

○司会 それでは、基調講演に入る前に、再度、注意事項を申し上げます。

配信をごらんの皆様は、あらかじめサミットホームページから資料をダウンロードしていただきますよう、お願いいたします。

ライブ配信に伴い会場の観覧席も一部映る場合がございますので御了承ください。

新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点より、会場におきましては、マスクを着用の上、お席の御移動及びお食事は禁止とさせていただきます。お飲物につきましては、ペットボトルや水筒など、ふたの締まる容器を御利用くださいますようお願い申し上げます。

また、会場内での大きな声での御歓談は御遠慮くださいますようお願い申し上げます。講演中は、携帯電話の音が鳴らないよう設定をどうぞよろしくお願いいたします。

【基調講演「千葉常胤と鎌倉時代の千葉の町・村」】

○司会 それでは、大変長らくお待たせいたしました。これより基調講演に移りたいと存じます。

本日は、東京大学名誉教授でいらっしゃいます保立道久先生より、「千葉常胤と鎌倉時代の千葉の町・村」をテーマに御講演いただきます。保立先生、どうぞよろしくお願いいたします。

○講師（保立） きょうは、そういうテーマで話をさせていただきます。レジュメが配られていると思いますので、それを御参照ください。

最初のところにですね、載せました千葉市のロードマップというのを載せてあります。その一部を読みますけれども、今から893年前、平安時代後期の1126年、大治元年に、千葉常重が大椎から現在の中央区亥鼻付近に本拠を移したことにより、本市の都市としての歴史が始まったとあります。

大椎というのは、もう外房線の大網の手前ですから、随分遠くだと感じられると思いますけれども、そういうふうに書いてあります。

私の話はですね、この千葉市のロードマップという文章をどう考えるべきかということを中心にお話することになります。

まず、引用した文章の最後に、頼朝は常胤を父のように慕っていたとありますけれども、これは厳密に言えば問題があります。

状況を説明しますと、頼朝の蜂起の前から常胤と頼朝は連絡があり、合意がありました。常胤の子の日胤は頼朝の祈とう師をやってしまして、以仁王の蜂起で戦死をしています。

それから、蜂起の前に、子供の胤頼は、伊豆の北条のその頼朝を訪問しております。もうこの2人はですね、以仁王、そして以仁王を担いだ源頼政、御存じだと思いますが、に關係

があったということです。

蜂起した頼朝は、安房に着いたわけですね。そして安房に着いたときに、常胤に使者を出しています。常胤は予定どおりということで、お迎えに参上するというように返事をしました。そうしたら、そのときに、その合戦が始まってしまいまして、これは下総の国司の代官とそれから藤原親政という平忠盛の婿という相当の人物ですから、結局、頼朝を安房まで迎えに行くことはできませんでした。

ただ、これに勝利した常胤は、千葉の港、結城浦から頼朝を船に乗せて、今で言いますと市川にありました下総の国府に迎えました。

頼朝と常胤は、このとき初対面だったわけですが、このとき頼朝は、司馬（常胤）をもって父たるべき由と述べました。これは、頼朝は常胤を父のように慕っていたということではありませんね。これは父たるべしということですから、義父としますということでもあります。千葉市の文書は、ここは直したほうがいいと思います。

頼朝は、常胤などの力で鎌倉に入場します。すぐに、御存じのように平氏が東国に下ってきましたけれども、藤原の合戦で東国側が勝利をします。その後どうするかという相談になったわけですが、頼朝はすぐもう京都に攻め上ると主張したわけですが、常胤がそれをなだめてですね、まず、東国を平らげてから行くということで話が決着しました。

常胤と、そして常胤の遠縁に当たります上総広常の地位は、この時期非常に高いわけがあります。実際に、この年の年末に頼朝の邸宅が鎌倉にできますが、そのとき頼朝は広常の館から引っ越しを始めたということで、要するに、広常が頼朝の、主人の引っ越しの世話をしている。これは、要するに家来としては一番偉いわけですね。

これは常胤も同じで、すぐ、年が明けて、頼朝は鶴岡八幡宮にお参りをしますが、その後、直会の大宴会をやります。そのときのトップが常胤なわけであります。世話役は常胤がやると。

常胤のその義父としての行動で目立つのは、頼朝には大姫という娘がいました。その住み場所、小御所をつくるわけですが、常胤はその責任者であります。常胤は頼朝の義父として大姫のおじいさん役をやっているということですね。

常胤が義父だというのは、広常より年長だからですけれども、きょうは詳しくお話する余裕はありませんけれども、私は、広常は頼朝の弟の義経の世話役だったと考えています。いわば叔父さん役ですね。常胤と広常は頼朝の家族を分担して世話するということだったと考えています。

常胤は、政子が頼家を妊娠したとき、その安産の腹帯ですね、それを常胤の奥さんがつけて、嫡子の胤正がそれを届けたと。それで、その届けられた腹帯を頼朝が政子のお腹に巻いたというように記録には出てきます。

頼家が無事誕生しますと、そのお祝いのお七夜ですね、これを千葉常胤が一族郎党を挙げて主催をするわけであります。伊豆の頼朝の蜂起の2年後のことですけれども、このときが常胤の権威の絶頂だったというように、私は思います。

この時期、一番血気盛んなのは、その常胤の遠縁の広常でありまして、広常が中心になって、その京都をどう攻めるか、京都の平家をどう攻めるかという戦略を練ったと。で、それはどういう戦略だったかといいますと、木曾義仲と同盟するということだった。常胤も、当然それに乗って動いていたと思います。このころは、頼朝も義仲も、先ほどの以仁王ですね、以仁王の命令で平氏を征伐するという同じ名目で行動していますから、これは当然のことでした。

ところが、これは結局、常胤にとっては不利に働いたと思います。つまり、このために、義仲は後顧の憂いなく京都に一挙に攻め上るわけですが、その前にですね、義仲の息子と頼朝の娘の政略結婚ということになります。このとき、木曾義仲は、義仲の息子は 11 歳、大姫は 8 歳です。

普通、大姫はこのころは 3 歳ぐらい下で、まだ 6 歳ぐらいだと言われ、5 歳か、と言われています。これはですね、普通、頼朝は、御存じでしょうか。伊藤祐親という人の娘と結婚して、それで子供が生まれたけれども、それを祐親に殺されて、で、悲しくなって政子のところにすがりついたという話になっていますね。これは事実は違って、その伊藤祐親の娘と政子の 2 人に同時にどうも通っていたというのが事実のようであります。それで計算すると、大姫の年齢は 3 歳ほど年上になってしまいます。これは私の本に書いてありますが、この本を出した出版社がつぶれてしまいましたので、私のホームページからネットワークで公開してありますので、興味ある方はごらんください。

常胤と広常にとって不運だったのは、木曾義仲がその以仁王の息子、遺児を迎え入れるのに成功して、破竹の勢いをもって京都に進軍して、平氏を負かしてしまったことであります。

頼朝というのは、ひどい男で、それを喜ばばいいのにですね、義仲に功績をとられたというふうに反発して、おまえのせいだと言って広常を殺してしまうわけであります。

広常は義経の保護者であったということを言いましたけれども、頼朝はその広常を殺した上で、義経に、おまえ、京都に攻め上れと言って、その義経を、要するに何というか、戻るに戻れない立場に追い込んだというように思っております。それで、叔父さんの義仲を殺させたわけですね。

問題は、それだけでは済まなかったことであります。昔まではよく知られていたことですが、その大姫のお婿さんとして迎えていた義高を頼朝は殺すわけであります。このとき、先ほど言いましたように、大姫の年齢はもう 9 歳になっていますから、これは大変ショックだったわけですね。大姫は心を病んだと言われています。政子が大変に怒ったというのも有名な話であります。

常胤にとっても、主人の家に深くかかわるということは、とばっちりが来るわけですね。常胤は困ったと思います。ただ、これは想像ですが、政子と常胤は困った夫と困った主人を持った同志として仲がよかったと。それで、何しろ義父という立場に一度立ったわけですから、常胤はこの危機といいますか、困った状況をとにかく乗り越えたと、切り抜けたと。逆にですね、広常の所領を与えられて、上総・下総の両方を代表する武士となりました。

ただ、これはまあ、良し悪しだったと思いますね。常胤はこれで義父というより、有力だけれども、普通の御家人並になったという側面があると思います。

永井路子さんの「炎環」という小説があります。一度お読みになってみられたらいいと思いますけれども、鎌倉幕府の初めというのは、いわばテロに続くテロ、同族殺し合うというすさまじいものであります。それと比べると、常胤という人は、正直言って余り悪いことをしていないと、それから、仲間を殺していないと、それから謡を歌う趣味があったらしいということで、なかなか興味のある人だと、私は思います。

有名なのはですね、三浦義村という男がいます。これは、三浦と千葉が同胞で、その頼朝を支えたわけですね、東京湾の西と東で。この三浦義村は、同族の和田義盛を裏切って殺した和田合戦というのをやりました。その後の正月の鶴岡参詣の後の大宴会の後ですね、常胤の曾孫の胤綱が座上に座っている、席次が上のほうに座っている三浦義村の上にむずと座り込んだと。そうしたら、義村が下総の犬はどこで寝ればいいのかも知らないのかと、のけと罵ったと。それに対して、胤綱は、三浦の犬は友を食らうと罵り返したという話であります。

これは、この宴会の最初の主催者、鶴岡の後の鶴岡参詣の後の最初の宴会の最初の主催者は、先ほど言いましたように千葉常胤でありますから、広常誅殺後の冷遇に耐えた千葉氏のその誇りをこう示すものだというふうに、私は思っています。

さて、私は頼朝ほど猜疑心が強い主人でなければ、常胤と広常が武家幕府の中枢に居続けたと、かもしれないと思います。そうは簡単にいかなかったでしょうけれども、頼朝を厳しく見ておくこと、これは千葉県の歴史から当時の歴史を見るためには、どうしても必要なことなので、頼朝には厳しすぎたかもしれませんが、こういうふうに御報告しました。

ただ、きょうの話は、こういう政治の話ではありません。千葉の町がどういうふうにつくられたかという話であります。歴史学にとって本当に難しいのは、こういう話でありまして、私は歴史の文化のあり方からいっても、こっちのほうが大事だと思います。

千葉開府 900 年という話になるわけですが、申し訳ないですが、これも厳密にいうと誤解を招きます。要するに、千葉の歴史を考えるためには、もっと長い視野、遅くても 8 世紀から、奈良時代からの視野が必要です。

学会で一致しているのは、千葉の郡衙、郡役所は今の千葉寺から北のほうに広がっていたということ。それから、千葉寺は千葉郡の郡の寺というべきものであったということです。千葉市文化財調査協会におられた築瀬さんの「中世の千葉」という論文の見解でありまして、千葉市としては、この論文によって歴史的なまちづくりの方針を考えるべきだと、私は思います。

千葉の町の起源は、直接には奈良時代の河曲駅（かわわのえき）にあると思います。

下総には駅が 3 つありますけれども、そのうち一番南が河曲の駅で、これは通説では寒川村にあったといえます。ただ、私は、河曲の地名は、恐らく猪鼻台から都川の曲がり具合を見てつけた地名だろうと。そうだとすると、もう少しその猪鼻台に近いところで、今の県立

図書館の辺りかもしれないというふうに考えています。

駅というのは、軍事用の施設でありまして、この駅は駅馬 10 疋を抱えていましたから、一定規模のものだったはずですね。そのうち、遺跡か墨書土器か木棺が出てくればいいのですけれども、そうすれば確定するだろうと思います。

私は、千葉氏の最初の館もこの近く、もう少し南にあった可能性があると思います。

大体、領主の館と商人や庶民の住む町は、ある程度離れているのが普通であります。そうだとしますと、900 年前、千葉を立つというのは、都川の南の郡衙、駅の周辺から都川の北側を開発するということがあったのではないかと。

資料は掲げませんでしたけれども、更級日記を御存じだと思います。更級日記というのは、上総から京都に上る女が今の浜野の辺りを朝立って、その後、深き河を舟にて渡って、今の黒砂辺りに泊まったというふうに書いてあります。私は、この深き河というのは都川のことだったろうと思います。河の中には「まのの長」という没落した人の家の跡があって、その家の跡の門の柱が寂しく立っていたというように、更級日記には書いてあります。

更級日記の時代、11 世紀の半ばには橋はなかったんでしょうね。しかし、12 世紀に入ってから、さっきのその大治元年、千葉を立つというときには、あるいは橋はあったのではないかと。あるいは、このときにつくったのではないかと思います。これは証拠はありません。

千葉を立つというのは、千学集抜粹という史料に書いてあることで、そこに簡単に引用しておきましたので、冒頭だけ読みますと、大治元年 6 月の朔、初めて千葉を立つというようにあります。この史料がロードマップの根拠になっているわけでありまして。ただ、この史料は原本もないのですが、妙見様、現在の千葉神社、つまり歴史の上で正しく言えば、北斗七星の信仰を掲げる妙見宮金剛授寺というお寺の伝承を記録したもので、なかなか興味深い史料であります。

ただ、江戸時代に入ってからのものでありますから慎重な扱いが必要で、それをそのまま信じるわけにはいきません。ただ、私は、初めて千葉を立つを、千葉に荘園を立てたと理解すれば筋は通ると考えています。それと同時に要するに開発にとりかかったというわけですね。この荘園は千葉庄でありまして、当時、権勢並ぶ者がなかった白河法王、白河院に寄進した荘園であります。鳥羽天皇の娘、八条院領になりました。

千葉庄は、千葉郷全域を対象とする下総でも非常に大きな荘園ですから、これは中央直結の大規模な動きですね。これは仲介者がいたと思います。仲介者は、この年の 8 年ほど前に下総の国司をしていた男でありまして、源頼政の父仲政という人物です。

吾妻鏡という鎌倉幕府の史料には、同じころに常胤の父、つまり常重が千葉庄の検非違使となったとあるのも話が合います。常胤はちょうどこのころ、1118 年に生まれています。常胤の父は、源仲政に従い、常胤はその子の頼政に従ったという可能性が高いというように思います。それで、八条院というのは鳥羽天皇の娘ですけれども、彼女が以仁王及びその遺児の保護者であることは有名でありまして、全て話は合ってくるわけでありまして。

さて、問題はこの時期に千葉氏がどこにいたかでありまして。うっかりすると、今でもその

猪鼻城、千葉城にいたと考える方がいるかもしれませんが。さすがに、千葉市の文書にはそういうことは書いていないわけですが、県の教育委員会のホームページを見ますと、そういうふうにも読めるように書いてありますから、千葉市民がいろいろ迷うのは無理もないことだと思います。

ただ、13 世紀までは、猪鼻台に建物はありません。儀式用の杯が主な遺物で、ここは一言でいうと、湊のみえる丘、恐らく灯台の機能はあったかもしれません。お墓があったことは確実で、小さなお堂や祠（ほくら）もあったでしょう。

私は、40 年近く前、横浜の金沢区六浦で上行寺東遺跡という遺跡が発見され、湊のみえる丘であることがわかりました。私もこの遺跡の保存運動に参加していましたが、そのころ勉強してですね、もう 40 年前になりますけれども、六浦と千葉の間には船便が動いていたということを知りました。

実は、こういう湊のみえる丘というのは東京湾には多いんですね。新幹線が品川に入るときの左手の山、品川のあれは御殿山と言います。それから、浅草の石浜なども同じような小山があります。残念ながら、六浦と品川と浅草は消えてしまいましたけれども、猪鼻台は、ほかと比べれば地形はよく残ったので、東京湾全体にとって重要で、千葉市にとっては、10 年、100 年後を考えたときに、重要な観光資源になると思います。

ただ、残念だったのは、千葉城や県文化会館の建設時に、敷地の下を調査せずに遺跡を破壊したことであります。あるいは、12 世紀の段階で千葉氏の館ではないにしても、後詰めの城だったかもしれません。戦国時代になれば海城だったかもしれません。遺跡の破壊は、もう、それを考えることを非常に困難にしまいました。

次のページにまいりますけれども、それでは、千葉庄を立てたときに千葉氏の館はどこにあったかですけれども、14 世紀ぐらいまでの武士の領主の館は平城でしたから、徳川期の千葉町の絵図にあるように、千葉地方裁判所が第 1 の候補であります。第 2 の候補は、千葉寺に近いほうということになります。この可能性も高いだろうと思いますけれども、これは発掘調査なしには確定できません。

先ほど、頼朝が三浦半島で負けて、伊豆で負けて、安房に着いたと。そのときに常胤に使いを出したという話をしました。で、使いを出したら、その使いは常胤の館の門前からその客亭に通されたと。常胤は、門客を率いて参上すると答えたといいます。ですから、当時の千葉氏の館には客亭があり、周辺には家来、門客の家があったことになります。これはぜひ発見したいですね。確実にこれはあったはずですから。

これがどこかということが問題なわけでありまして、この邸宅跡と合わせれば、猪鼻台は非常に立派なその観光資源になるということでもあります。

さて、大治元年、初めて千葉を立つということの意味は、要するに、荘園を立て、同時に千葉の市町を立てたと、市街地をつくったということでありまして、決してその千葉氏の館や城を立てたということではないということを御説明できたように思います。

これが、千葉氏は、市川市にあった国府に対して、下総最大の都市、中心地として発展す

る起点となったことは確実でありまして、千葉開府というのは誤解を呼ぶにしましても、その意味ならば、千葉 900 年ということと言ってもいいということでもあります。

千葉の市民、私、実は千葉に住んでいますので、何人かに聞きますと、千葉開府 900 年、えっ、ほんとかという反応があるんですけども、これは言っていることを申し上げたいと思います。

問題は、この市町を立てるということは、史料ではどう出てくるかといいますと、そこに掲げておきましたけれども、市町興行というところですね。左の上のところですね。

市町は辻・小路を通し、見世棚を構えしめ、絹布之類・贅・菓子、売買之便、売買の便りあるの様に相計らふべきなりと言われます。これは、説明しますと、市町をつくるには、辻と小路を通し、見世棚を構えさせて、絹だとか贅だとか菓子。贅というのは魚ですね。魚だとか木の実だとか、そういうものであります。魚ですね。それで菓子は木の実であります。などを売買するようにせよということですけども。町には町屋というものが並びます。庶民の家が道路に面して並ぶということでもあります。

町にはいろんな人が集まりますが、そのうちその物売りをする家には、そこに右下に絵を掲げてありますけれども、こう町屋がありまして、前にそのテーブルがありますね。このテーブルを見世棚というように言います。

この町の様子もですね、実はもう今となつては発掘調査でしかわかりませんが、どういふふうに町がつくられるかといいますと、最初は一筋町がつくられる。それからそれが二筋町になっていくというように考えられます。

一筋町というのは、下段の真ん中に尾張国の萱津宿というところの絵図を掲げておきました。鎌倉時代の絵図であります。これは、絵には見えませんが、この北のほうには市場があるということが知られております。これは後で言いますけれども、千葉と同じだろうと思います、形はですね。北のほうに市、町外れのほうに市場があるというのは。

二筋町というのは、その左側の図でありまして、これは安芸国のほうの市場町の図でありますけれども、両端に辻があつて、これはミドリムシみたいな形になってはいますが、中でこう直角に小路をこう直角に通しているわけであります。これがその二筋町であります。

次のページに行きますけれども、この右上の図はですね、明治の地籍図からつくった千葉の町の図であります。赤線のところが古い町で、右側は本町通り。今で言えば、千葉神社、郵便局、美術館の広い通りであります。

左側の赤線が吾妻町通り、裏町通りで、ここを歩いてみると、明治の千葉の町は小さかったということが実感できると思います。真ん中の地図は、真ん中の図は、郷土博物館寄託の徳川時代の千葉町の絵図ですが、明治になつても余り変わりはない感じがしますね。

注目したいのは、先ほど言ったミドリムシのような形の町、楕円形の町ですね。その北部が、何ていいますか、スパンと切られていることでもあります。今で言う通町通り、横道を通してあるわけですね。これは妙見宮、現在の千葉神社とその南に八幡神社、そして大日道と

いう寺社区域をつくったということで、今、通町公園になっています。これは築瀬さんによると、恐らく13世紀半ばごろに、町の北に鎌倉の鶴岡のように八幡宮を置くという都市プランで、町組みを変更したんだろうというように言われています。

千葉には、要するに八幡宮を北に置くだけでなく、そのさらに北に妙見宮、北斗の神様を置いたというわけであります。私もそう思います。そうだとすると、千葉の町はそのときには、既に二筋町になっていたんではないかというのが推定であります。

この二筋町は、今でも千葉の町では地盤が高いところで、昔は周辺は湿地、水田であったわけですが、問題はこの二筋町がいつできたか。鎌倉時代初期か、それともその問題の大治元年のころにはどうだったかということで、これは、恐らく最初は一筋町で、本町通りだけだったと思いますけれども、この実情の解明は、今後の発掘調査によるほかはありません。大和橋の遺構が出てくれば一発ですが、今後の発掘調査によるほかありません。

それから、町での商売や生活の様子は、今のところわかりません。ただ、そこに一部だけ文書の写真を掲げておきました。左上ですね。鎌倉時代に千葉売り酒という史料があります。これは客人の接待用に、「千葉にてうり酒なんど候はば、買ふべき由」とあります。崩し字を掲げておきましたけれども、千葉町に酒屋があったことは確実にあります。

そんなの当たり前じゃなかったっておっしゃるかもしれませんが、鎌倉時代の後期に、幕府は鎌倉市中の酒がめを叩き割って、その売り酒を販売禁止令を出しています。けれども、東国の鎌倉以外の町で売り酒が町にあったということを論証できる史料は、この史料だけなんです。私はやっぱり、大きな酒がめが千葉市街地の発掘調査で見つかることに期待をしたいと思います。

下段に掲げました絵は、鎌倉時代の絵巻に書かれた備前の国の市場の情景で、高校の歴史教科書では必ず出る絵ですが、これは左下に船が書かれているのでわかりますように、河原の情景であります。これは河原に立った市場でありまして、町ではないわけですが、この一番右のところの建物の拡大図がここに出ています、

そうすると、ここに大きなかめがあるのが見えますね。前に乞食がいて、奥に女の人がいる。これは酒屋、売り酒屋で、市場の売り酒屋であります。これは、千葉の町から市場にこの大がめを持って行って、ここで酒を市で売っているということだろうと。女の人とその酒売りをしているんですね。

市場は、女の人の世界でした。私はその町のほうも女性の比率が高かったと思います。当時、その豊かな人のことを有徳、徳があると言いましたけれども、有徳の女房というのが町の史料に時々見えることがあります。

ここで紹介したいのは、胡蝶陳状という千葉氏の法廷に提出された史料であります。一番左下に掲げてありますけれども、要約してありますけど、これは千葉氏の法廷に提出された訴訟の答弁書であります。この胡蝶という女性は、4歳のときから養母に養われていたと。それで、養母から贈物で、下女の人身売券をもらったと。それを、非常に大事なもののなので、自分のお守り袋に入れて、いつも身から離さず持ち歩いてたと。ところが、これをとられ

ようとしたということで、その千葉氏の法廷に訴えた史料であります。

女性が訴えた史料でありまして。守り袋というのはその左の絵の胸のところに書かれています。普通、これは着物の内側に入っているわけですがけれども。

次のページにまいります。この胡蝶の手紙といいますか、訴状ですね、訴え状の冒頭部分のコピーをつけておきました。これはきちんとした字でありまして、相当の教養があったと思います。

感じだと、恐らく 30 代という感じだと思いますけれども、彼女は農村の住人とは考えられませんから、市川の下総国中山法華経寺のそばか、千葉町、千葉に住んでいたと思います。

私は、千葉氏に仕える女房である可能性が高いと思いますけど、あるいは巫女さんかもしれない。何か生業をしていたはずで、あるいは酒屋か、あるいは遊女だったかもしれないと想像しています。四、五人の下人を抱えているというんですね。

酒売りというのは、酒屋はさっき言いましたように、しばしば女性だったからですね。沙石集という鎌倉時代の物語集に、売り酒家の徳人の尼と。尼さんが酒を売っているという史料があります。

それから、鎌倉の町を描いた頬焼阿弥陀物語とかいう物語を読みますと、「鎌倉に町の局とやらん聞し徳人あり」というように出てまいります。

残念ながら、千葉市の市街地中心部は目立った発掘調査がありません。先ほどの本町通りと裏町通りの間を発掘してくれればいいんですけども、ただですね、千葉は鎌倉以外で関東で最もよく奈良時代からの文献資料がそれなりにある町であります。史料は多いと思います。

中世でも千葉に関する文献資料は、先ほど言った金沢区の六浦のところにあります称名寺というお寺がありますけれども、つまり金沢文庫の文書ですね。金沢文庫の文書に千葉の町の話は相当出てきます。

こういう文献資料と合わせて、その鎌倉のように、市内で建物を改築するたびに発掘調査をする体制をつくってもらい、千葉市と鎌倉市で競争してくれればいいというふうに私は考えております。千葉は大都市ですから、それは可能ではないかと思います。

千葉に関係する文書として重要なのは、もう一つ、また、あの市川の中山法華経寺の文書があります。中山法華経寺の開基は富木常忍という人ですけれども、千葉氏の重臣で、法廷で扱った訴訟の用済み文書を日蓮聖人がお経を書写するための紙として回しました。

実は、今御紹介した胡蝶の文書は、その中山法華経寺の文書なのであります。これは、つまり日蓮が触った文書なんですね。中山法華経寺の文書は非常におもしろいもので、意外なことが書いてあって、さらに研究が必要なものです。

おもしろいのは、日蓮の弟子たちには、現世利益の思想があったことであります。中山法華経寺の開基の富木常忍は、出家して日常という僧侶になっていますけれども、彼の手紙に、御徳の種の粃 2 石を送りますというのがあります。種粃を送るから、これを元手にして貸し付けるなどして 10 年励んでみろと。そうすればどうにかなるからってという忠告をしていま

す。この徳の種の粕というのは、大変おもしろい言葉ですね。

こういう考え方で、東国では14世紀ぐらいから、品川、六浦、市川には日蓮宗の有徳人がいて、その名前もわかっています。千葉の本町通りより東に本円寺という日蓮宗の寺院がありますが、ここは日蓮聖人の旅宿の跡だと言われているので、千葉にも日蓮宗の有徳人がいたことは確実だろうと思います。

さて、千葉市の活動を支えたのは、明らかにこういう千葉の豊かさ、千葉の町の豊かさであったと思います。

その次に、この富がどうやって生み出されたのかということを見ていきたいと思います。

その第一は、交換経済と交通であります。

以前の古い考え方ですと、大体その14世紀以前は自給経済で、14世紀以前から定期市が立つようになったということ言われています。そういう側面もあるだろうと思いますけれども、実際には交換経済は古くから活発でした。市場を立てると言うことが善政であるということは、頼朝自身が述べています。平泉を征服した後、そこに置いた武士が市場を平泉に立てたということを社会が治まっている証拠であると言ってほめたといひます。このことを市の平和と言いますが、千葉常胤も当然それは知っていたわけであります。

この市の平和を保障するためには、市場は河原や野原のような誰も所有していない場所、所有しにくい場所に立てるという慣習がありました。これは千葉でも同じことで、平安時代にも言えることだと思います。

つまり、今でも、猪鼻台の下の辺りを市場町と言います。徳川時代の町絵図にも町方の「市庭」と見えます。平安時代には、町屋は本町通りに並んでいて、市場はここにあったと。これは都川の河原地帯であります。千葉の市場はやっぱりあそこだと、何か遺物が出ればいいんですけれども。

私は、さらに、これは千葉の港はどこだったかという交通問題にもかかわってくると思います。

上段左に、簡単な手書きの乱暴な図を書きましたけれども、都川の北に「本町通」と「裏町通」が見えますけれども、大和橋をこう渡ってきて、市場町があつて、その南に長洲という地名があります。実はここは、長洲という町は、千葉氏研究の第一人者である野口実さんが前に住んでいたところですが、私は、この長洲というのは、海辺の長い砂州に係する港の地名だろうと思っています。

千葉の港はこっちの方向にあつて、昔は長洲から寒川の辺りに、規模はわかりませんが、入り江、ラグーンがあつて、そこが天然の良港になっていたのではないかと思います。

当時の港は、必ずラグーンが必要でした。都、寒川には、川崎製鉄が建つ前までは船だまりがあつたといひます。猪鼻の南には、千葉郡の役所、郡衙があつたといひことは言ひましたし、千葉寺は郡のお寺であつたと申し上げましたけれども、そうすると、この寒川は恐らく郡の津、郡の港であつた可能性は非常に高いといひます。

先ほど、市場を立てるときには、いろんな人を集めると言ひましたけれども、その中に、

廻船人、船ですね。それから。それから梶取、それから漁師とあります。船人と漁師はここら辺にまとまって住んでいたはずであります。

なお、これまでの考え方は、千葉の港はむしろ湊川の北にあるということだった、そっちが目立ちますけれども、私はやっぱり、ここだったというように思っています。

東京湾の湾岸流は北から南に流れるので、砂州はこういう形で出てくるのではないかと。ただ、これはぜひ、地質学と考古学、歴史学の協力によって明らかにしたいことであります。この地質学、考古学と協力は、今から始めても5年、10年かかると思いますけれども、現実にも意味があることだと思います。

千葉市民の方は、千葉市が配布している地震ハザードマップをごらんになったことがあると思います。それによると、ここら辺は地盤液状化の可能性が高いとなっています。これは都市計画の基本問題だと思いますけれども、それをやはり、市民が昔の地形、地質に関係して考えられるようにしてほしいというように希望しております。

この千葉氏サミットの第1回では、野口実さんが千葉氏が一族を全国に分布させて、東アジア世界にも広い視野を持っていた極めて興味ある武士団であったことを強調しています。千葉氏は全国的なネットワークを持っていて、そのために千葉氏サミットという自治体の関係が可能になっているわけです。

ここでは、その全体をとてもお話しできませんので、簡単ですが、その基礎に千葉氏が水源ルートをつかんでいたということを御報告したいと思います。

下段の地図を見てください。まず、千葉とその六浦の間に船便が通っているわけであります。六浦からは切通しを越えてすぐ鎌倉ですから、この六浦・千葉のルートは、いわば海の鎌倉道になります。

先ほど、北条氏のお寺「称名寺」の文書には、千葉に関する史料が多いと言いましたけれども、それはですね、実は千葉の町の北の千葉神社のところにある大日堂というのが律宗と言われる宗派に属していて、称名寺と非常に縁が深かったからであります。

律宗というと、今、ほとんど知られていませんけれども、北条氏の全面的なバックアップを受けて、この時期、全国に発展した宗派であります。ちょうど、私はこの宗派の研究をしているのですが、実は聖徳太子信仰を広げた宗派でありまして、それから観阿弥だとか世阿弥の能ができる上でも、最も大きな役割を果たした宗派であることを、先日、論文を書き上げたところであります。

市川は、中山法華寺がありますから日蓮宗ですが、千葉は何ととっても、この律宗が強かったと思います。このルートは、地図の一番上にいきますと、筑波山のそばの極楽寺、三村山極楽寺に行くわけであります。霞ヶ浦には、港ごとに律宗の寺が分布しております。その道を通って海の鎌倉道が広がっていたということになります。

これは、注意したいのは、常胤が1885年に頼朝から片岡常春という人の所領であった銚子の南の三崎庄を与えられていることであります。広常の殺害があつてからちょうど2年半後ということですね。

このとき、頼朝は、常胤の忠義を感じると言って与えているんですね。これは、要するに、端的に言って常胤の勝ちだというように思いますけれども。もちろん、三崎庄は4年ほどで元の片岡氏に返されるのですが、現地では常胤との関係を優先して、それを無視しようとしたとされていますから、常胤は銚子に権益は維持したと思います。これは非常に大きかったと思います。

大きく言えば、外房とそして東北への水運のルートを握ったということですね。これはきょうの自治体サミットの参加のうち、東北と千葉県内の自治体をつなぐ道ということになります。

さて、この下総の東西を貫く海の鎌倉道を考える上では、千葉港の様子が基本になります。私の書いた地図が正しいとは限りませんし、少しラグーンが大きすぎると思いますけれども、どうかして確定する必要があると思います。猪鼻台から湊がどう見えたかということが、これで決められるわけですし、千葉神社の御神輿が昔はどこの海に入っていたかということにもかかわってまいります。

さて、最後のページですけれども、千葉の町の豊かさは、港や交通のほかに、千葉の村によって支えられていたことは言うまでもありません。これは端的に言って、千葉の河川沿いに広がる谷戸田の豊かさだろうと思います。

これは、今は農業の困難な状況もあって、谷戸田が荒れてしまいましたけれども、少し見回っただけでも、その豊かさが実感できると思います。東国、この時期の東国では、大変豊かな国だったというようにお考えください。

それで、千葉氏の同族と有力な家臣は、この谷戸田の丘の突端に住んでいたのではないかと思います。谷戸田を開発し、その近くに住んで、千葉町とつながる交通路に沿って広く下総全体でネットワークをつくっていたと。領主連合、地主の連合であります。

15世紀以降、戦争が激しくなると事態は変わるでしょうけれども、これは平安時代から14世紀ぐらいまでは変わらないと。もちろん、頼朝の使者が常胤のところに来たときに、常胤が門客を率いて参上すると答えていますから、千葉氏の館の周辺には、家来や門客の家があったことは事実です。

けれども、それは身近な家来と食客の浪人たちで、14世紀までは、千葉氏の家臣団の基本は、本拠地におのおの屋敷を構えて、それで千葉町に時々出てくるということだったと思います。

私は、14世紀以降の史料を自分で追っていないのでわからないことは多いけれども、15世紀に応仁の乱が起きる前に、東国でも同じような足利氏の内紛が起きます。享徳の乱などと言いますが、それまでは、要するに、武士がおのおの本拠地にいるということで、千葉の町に武士の家臣団が集住する、集まり住んでいるということは、まあ、ないというふうに思っております。

こういう谷戸田の領主、地主の連合という考え方は、大治元年、初めて千葉を立つというものの最後の謎にかかわってきます。それは、常胤の父の常重が大椎から千葉に移ったとき

れていることでもあります。

これも千学集抜粹にあることですから、必ず信用するということではないですけども、最終的には発掘調査で決められるといいと思いますけれども、これが千葉氏の内部で伝承されていたと考えることには、問題がないようにも思います。

大椎はもう、外房線の大網のすぐ手前ですから、私のようにほとんど千葉しか知らない者からすると、随分遠いところから来たという感じですけども、これは谷戸田のネットワークの中で千葉氏は動いているんだと考えたら、そう遠くない、昔の人にとってはそう遠くないということだと思います。

享徳の乱のときには、千葉の宗家は千葉から平山に移動したり、あとは佐倉に行くわけですけども、これは千葉氏の習性のようなものなんだと思います。

さて、最後に、もう時間もあれですので、あと 10 分ですか。あと 10 分ありますね。あと 5 分。

最後に、あの千葉の谷戸田の具体例を紹介して、私の話を終えたいと思います。

下段右の文書をごらんください。これも、実は日蓮さんのお経の裏にある文書ですけども、寺山郷という村の領主の寺山殿に対する百姓の訴えを書いた文章であります。

要約すると、寺山殿が理由のない訴訟をして、私に罪科があると号して田畠を刈り取り、御領を追い出したと、困っているという訴えであります。

御大田植のお祭りのときに忌中だったと、親父さんが死んで忌中であつたので、仏事をしたら、おまえはけしかん。死罪に処すというように、その領主が脅迫したと書いてあります。

きょうは、この争いを詳しくこの文書を説明している時間はありませんので、きょうは、この争いの現場はどこかということに絞りたいと思います。

左上の写真をごらんください。これは、西千葉の駅から作草部のモノレールの駅に向かって行って駅を越えて坂を下り切ったところであります。実は、私が住んでいる辺りになります。

真ん中を京葉道路が通っていて、右上をモノレールが通っています。写真の真ん中から右が問題の寺山の中心部であります。真ん中の下の辺りが高品交差点で、黒丸のところにタイヨウというスーパーマーケットがあります。赤い字で谷戸田と入れてありますが、そこから谷戸に入っていくわけですが、この文章を書いた百姓橘重光という男はこら辺に住んでいたのでしょうか。ここは、前は一帯が水田地帯でしたが、現在は「谷戸」と書いた辺りに辛うじて水田が残っているだけとなってしまいました。

私の橘重光の訴えの読みですと、こら辺で大田植という田植えのお祭りをやっていたわけですけども、それを思うには、相当の想像力が今では必要になっています。

領主の寺山殿が屋敷を構えていたと思われるのは、右上の丸で囲ったところで、今は殿山ガーデンと乗馬の練習場やテニスコートがあるところになります。

戦国期の史料によれば、ここには通平寺城、あるいは寺山城があつたということでもあります。

高品交差点のところには高品城があって、ここは千葉氏の宗家が佐倉に移った後にも妙見さんにお参りに来るときに、ここを通って、それを高品城主の安藤氏が世話をしたということについては、外山さんの詳しい論文があります。こういうところは、日常的な場所ですから、わざわざ行くという価値はないかもしれません。だけれども、そういうところだということを知っているだけで、千葉という町の見方は少し変わってくるのではないかと思います。

さて、まとめですけれども、私は歴史家ですので、こういうことを調べていると、歴史の破壊ということを実感します。

千葉の歴史の破壊は、3度あったと思います。第1は、明治維新という無理な欧米帝国主義をまねした資本主義化の時期でありまして、決定的だったのは、やっぱり廃仏毀釈であります。

日本の寺院は、神社と長く一体をなしていましたから、これは結局、神社にとっても決してよいことではありませんでした。何よりも千葉にとって問題なのは、妙見さんも金剛授寺というお寺、宮司、宮寺だったわけですから、このときに無理に千葉神社にしまったときに、大量の史料が失われたと思います。ともかく、千葉を立つという情報を伝えた千学集抜粋がどうなっているかよくわからないということになったことは、極めて残念であります。

2番目は、言うまでもなく、アジア・アメリカ戦争と千葉大空襲であります。

そして、3番目が1960年代を中心とした高度成長とある部分での乱開発でありまして、このときには、千葉の歴史的な景観そのものが壊されて、埋蔵文化財も破壊されたということでもあります。

千葉開府900年を機会として、これを反省して残ったものを大事にして、歴史学や考古学の研究・調査・保存のあり方を抜本的に検討してほしいと思います。

壊されたものは取り返しがつきませんけれども、あと50年かけて本格的にやっていけば、残ったものから相当のことが復元できるはずです。いろいろ申しましたけれども、千葉開府900年というのは、大正時代の千葉開府800年をやっていることの伝統を受けた継続でありますから、大事なことです。

千葉市は、御存じのように、市制の施行が全国で77番目ということで大変におくれたわけですが、大正デモクラシーの時期に市制が実現をし、財産ある人のみが選挙権を持つと、男性についてはそれはなくなり、都市計画の基礎がこのときにできたわけであります。

千葉開府900年は、この大正デモクラシーの時期の仕事を引き継ぐもので、明治が壊したものの、そして、その後の戦争と高度成長の乱開発が壊したものをどうにかして取り戻す計画を立てることだろうと、時期だろうと思います。

具体的には、いろいろありますけど、そこに書きましたように、まず、都市計画の中に遺跡の発掘と保存と研究体制の確立を入れてほしいと思います。

江戸時代については、既に立派なものができています。これですね。「絵にみる図でよむ

千葉市図誌」というもので、これは全国にも珍しい非常に立派なものでありますけれども、これに加えて、奈良時代から中世まで現在の地図と歴史の研究結果を重ね合わせた千葉の地図をつくること、歴史地図をつくること、それが最初の入り口でしょうか。

そして、歴史教育を史料と事実に基づいて、小学生にはわかりやすく、中学生には筋道を立て、高校生には文化財破壊の歴史も伝えるという形で進めてほしいと思います。

私は、この時計の計算を5分間違っていたみたいで、最後は脱兎のごとき話になりましたけれども、御清聴を感謝します。(拍手)

○司会 保立先生、ありがとうございました。それでは、ここで、講演内容につきまして御質問のある方は、大変恐縮でございますが、感染対策のため、こちらのマイクからお願いしたいと存じます。

なお、お時間の都合で1名様に限らせていただきます。せっかくの機会でございますが、いかがでございましょうか。質問のある方は挙手をお願いいたします。

よろしゅうございますか。それでは、保立先生、ありがとうございました。御来場の皆様、もう一度、先生に大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

大変興味深いお話をありがとうございました。